

小学校におけるテニス型ゲームの実践

和歌山大学教授 村瀬浩二

和歌山市立野崎西小学校 山田充洋・井沼瑤

和歌山大学附属小学校 則藤一起・湊本裕也

小学校体育科におけるボール運動は、ゴール型、ネット型、ベースボール型の3領域を必修としており、各種目を3・4年生で1回、5・6年生で1回は実践することとされている。なかでもネット型は、前学習指導要領（2008）から必修とされており、バレーボール型の実践が多く報告されている。しかし、本年度、コロナ禍の影響により接触を減らす工夫が必要で生じた。そのため、テニス型の実践のニーズが高まっていた。そこで本研究は、テニス型の実践からその成果と課題を明らかにする。

1. 実施内容

小学校3年生1クラス26名を対象としたテニス型を実践した。実践の詳細を以下に示す。

- ① 使用した用具：スポンジボールと段ボールで作成したラケット
- ② コート：4m×6mのコートを体育館に4面作成した。図中の丸はコートサイドから1m程度の場所に配置したマーカーであり、第4時以降これより外側に打つことを課題とした。
- ③ ルール：シングルスゲーム、サーブは自コートにワンバウンドさせてから相手コートに打つ。その他はテニスに準じた。
- ④ 単元計画：7時間で実施した。詳細は表1に示す。

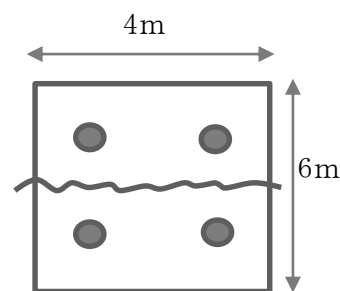


図1. コート

表1. 単元計画

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
学習の見通しをもちゲームへの準備をする	基本的なボール操作	ボールの落下点に移動して打つ	相手コートのねらう場所を考える	相手コートのねらう場所を考える	相手の場所を見て打つ場所を考えよう	相手の場所を見て打つ場所を考えよう

⑤ 運動が苦手な児童、運動に意欲的でない児童への配慮の例

- ・ゲームの勝敗を強調せず、自分や仲間の動きを理解することを課題とする。
- ・コートの横幅を広くすることで左右に振ることを強調し、課題を明確にする。
- ・ボールはソフトテニスボールを用い、コートの奥行きをあまり広く取らないことで、速いボールを抑制する。
- ・シングルスゲームで3～4人1チームとし、ゲームに参加する機会を確保する。

2. 調査内容

- ① 教師へのメールによるインタビュー
- ② 児童への毎時間の形成的授業評価

3. 各時間の目標の達成度に関する授業者のコメント(抜粋)

第1時：学習の見通しをもちゲームへの準備をする

準備片付けは押さえられたが、仲間の失敗や、対戦した相手への感謝については、本日の強調が不十分であった。

第2時：基本的なボール操作

授業のおわりには6割ぐらい打てるようにはなっていた。しかし、打とうとはしているものの、やはりまだ打てない子が半分ぐらいいると感じる。

第3時：ボールの落下点に移動して打つ

多くの児童はボールの動きに合わせて移動しようとしていた。目標の達成度としては、60～70%ぐらいであろう。

第4時：相手コートのねらう場所を考える

空いている場所を狙って打つことの達成度は5割程度である。空いている場所をねらうことを理解している子はもう少しいるものの、技能が追いついていない。前時までのボールを追いかけることの達成度は、8割程度であり、ボールに反応できない子どもは4、5人いる。

第5時：相手コートのねらう場所を考える

相手が真ん中にあることが多いという意見で、マーカーの外を狙うことに気づいた子がいた。半数は相手のいない場所をねらおうとしてたが、何もわからずにただ参加している子も2割程度であった。

第6時：相手の場所を見て打つ場所を考えよう

相手の場所を見て、空いたスペースを狙えているのは半数程度であった。ただ、前時よりは相手の場所を意識している子が増えていた。

第7時：相手の場所を見て打つ場所を考えよう

相手の場所を見ることは、9割できていたであろう。考えたところに打ち返す技能がある子は、7割程度であった。また、ラリーが全く続かなかった子どもも、最終の時間には打ち返せるようになっていた。相手の場所に注目し、狙う場所を考えられる子が6時間目からかなり増加したと感じる。

単元の反省

単元の中盤に技能の差が出てきていたので、単元の序盤にボール操作を身につけるためのドリルに重点を置くべきであった。3時間目までの「うまくボールをうつためにはどうしたらいいのか」というところで、狙う場所のことを大きく取り上げてしまったので、ボールの正面に入ることを押さえるべきであった。

4. 形成的授業評価

	1	2	3	4	5	6	7	平均
成 果	2.18	2.22	2.41	2.21	2.01	2.21	2.12	2.20
意欲・関心	2.87	2.83	2.81	2.78	2.70	2.70	2.62	2.76
学 び 方	2.37	2.60	2.59	2.44	2.26	2.43	2.34	2.43
協 力	2.52	2.63	2.48	2.55	2.44	2.48	2.43	2.50
全 体	2.45	2.53	2.56	2.46	2.32	2.43	2.35	2.44

全時間を通して見ると、停滞、低下した単元であった。意欲・関心については第1時が最も高く、その後徐々に低下している。成果の面でゲーム開始時の第3時に向上しているが、その後は低下傾向にある。また、第5時にすべての因子が低下しており、第6時に持ち直しているものの、全体的には低下傾向であった。

5. まとめ

ボールを保持できないテニス型は、難易度の高さのため習熟度に個人差がつきやすい。特に3年生は簡易版ではあるがスポーツ種目に触れる最初のものであり、ボールを持っていないというネット型独自の難しさに対してさらなる配慮が必要であった。今回使用したスポンジボールのスピードが速く、対応できない子どもが多く見られた。このことが、断続的な授業評価の低下につながったと推測できる。さらにゆっくり跳ねるボールなど、用具の工夫によって、テニス型の実践が可能となるであろう。